

イネいもち病に対する育苗箱施用剤

ジクロベンチアゾクス剤及びプロベナゾール 16%剤の防除効果

1 普及に移す技術の内容

(1) 背景・目的

イネいもち病に対する薬剤の育苗箱施用は、省力的かつ効率的な防除方法である。現在、本県では抵抗性誘導剤（2種類）がほぼ県内全域に普及している。これらの抵抗性誘導剤は本病に対して高い防除効果が期待できるが、近年、新規抵抗性誘導剤や既存成分の成分量を減らした製剤が農薬登録された。そこで、新規育苗箱施用剤の葉いもち防除効果について検討した。

(2) 技術の要約

イネいもち病（葉いもち）に対して、ジクロベンチアゾクス剤（新規剤）及びプロベナゾール 16%剤（既存成分減量剤）の育苗箱施用（移植当日、50g/箱）は、プロベナゾール 24%剤（既存剤）の同処理と同等の高い防除効果を示す。

2 試験成果の概要

(1) ジクロベンチアゾクス剤（新規剤）の防除効果

平坦地、山間地のいずれにおいても、ジクロベンチアゾクス剤の育苗箱施用（移植当日、50g/箱）は、プロベナゾール 24%剤（既存剤）の同処理と同等の高い葉いもち防除効果が認められた（図 1、図 2）。また、実用上問題となる薬害は認められなかった。

(2) プロベナゾール 16%剤（既存成分減量剤）の防除効果

平坦地、山間地のいずれにおいても、プロベナゾール 16%剤の育苗箱施用（移植当日、50g/箱）は、プロベナゾール 24%剤の同処理と同等の高い葉いもち防除効果が認められた（図 1、図 2）。また、実用上問題となる薬害は認められなかった。

3 普及の対象及び注意事項

(1) 普及の対象

鳥取県下全域

(2) 注意事項

- 1) 葉いもちの発生状況が中発生以下の条件で検討した結果である。
- 2) 2025 年 2 月 18 日現在、各有効成分を含む育苗箱施用剤は以下の商品がある。
 - ・ジクロベンチアゾクス剤：ブーンアレス箱粒剤、ブーンハーデス箱粒剤、レシードプラス箱粒剤等
 - ・プロベナゾール 16%剤：Cs. オリゼリディア EV 箱粒剤、Cs. オリゼリディア箱粒剤等
- 3) 穂いもちについては、既存の育苗箱施用剤と同様に本田散布剤等による予防防除を行う必要がある。
- 4) ジクロベンチアゾクス剤は播種時覆土前処理が可能である。
- 5) 薬量が不足すると防除効果が低下するため、規定量を均一に散布する。また、極端な疎植は避ける。

[具体的データ]

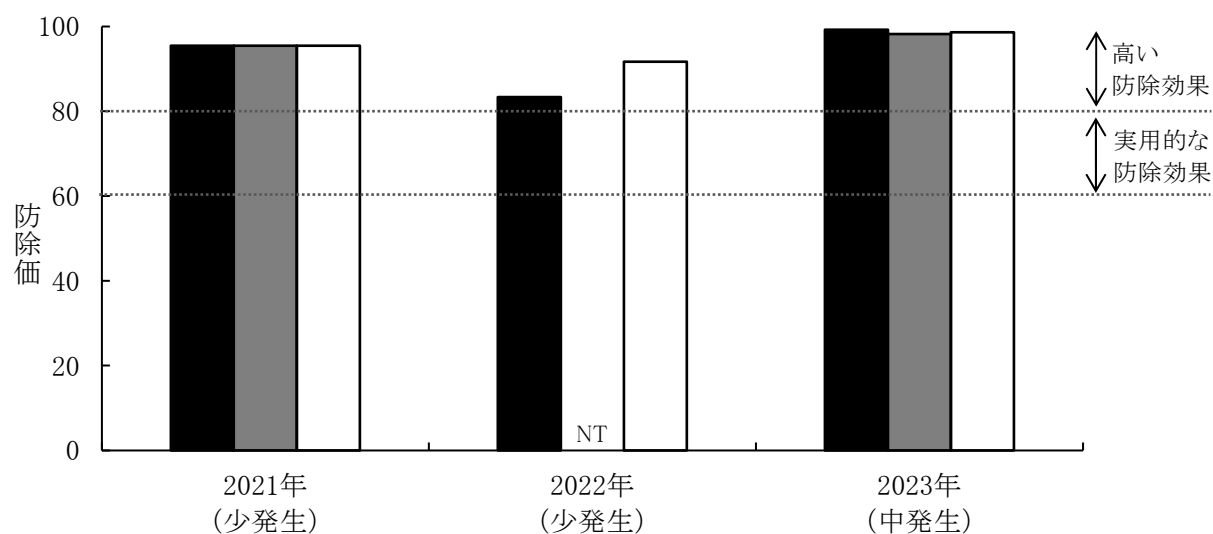


図1 ジクロベンチアゾクス剤及びプロベナゾール 16%剤のイネいもち病(葉いもち)防除効果(平坦地)

注1) 凡例及び供試薬剤

■:ジクロベンチアゾクス剤(ブーンゼクテラ箱粒剤)、■:プロベナゾール 16%剤(Cs.オリゼリディア EV 箱粒剤)、□:プロベナゾール 24%剤(Dr.オリゼリディア箱粒剤)

注2) 試験概要

試験場所:鳥取市橋本(鳥取県農業試験場、標高約 10m)

品種:‘きぬむすめ’

播種量:乾籾 150g/箱

移植:5月 19~24日(稚苗機械移植、15~20箱/10a、条間 30cm×株間 18cm)

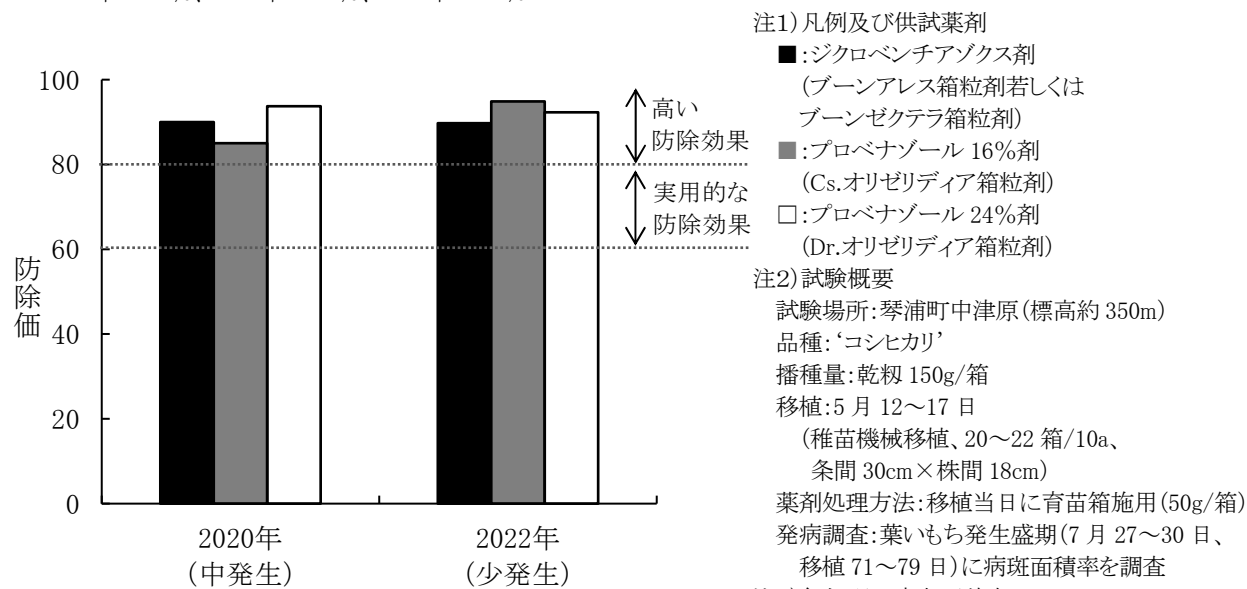
薬剤処理方法:移植当日に育苗箱施用(50g/箱)

発病調査:葉いもち発生盛期(7月 21~29日、移植 63~66日後)に病斑面積率を調査

※図中の NT は試験区不設置

注3) 無処理の病斑面積率

2021年:0.22%、2022年:0.24%、2023年:0.50%



注1) 凡例及び供試薬剤

■:ジクロベンチアゾクス剤(ブーンアレス箱粒剤若しくはブーンゼクテラ箱粒剤)
■:プロベナゾール 16%剤(Cs.オリゼリディア箱粒剤)
□:プロベナゾール 24%剤(Dr.オリゼリディア箱粒剤)

注2) 試験概要

試験場所:琴浦町中津原(標高約 350m)

品種:‘コシヒカリ’

播種量:乾籾 150g/箱

移植:5月 12~17日

(稚苗機械移植、20~22箱/10a、条間 30cm×株間 18cm)

薬剤処理方法:移植当日に育苗箱施用(50g/箱)

発病調査:葉いもち発生盛期(7月 27~30日、移植 71~79日)に病斑面積率を調査

注3) 無処理の病斑面積率

2020年:0.80%、2022年:0.39%

図2 ジクロベンチアゾクス剤及びプロベナゾール 16%剤のイネいもち病(葉いもち)防除効果(山間地)

4 試験担当者

環境研究室 研究員 宇山啓太